

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別裁承認雜誌第六二七号  
平成二十六年十二月一日発行(第四百十七卷第十二号)

# ホトトギス

十二月号



## 俳句随想 〔三百九十〕

汀子

一年に一度、公益社団法人日本伝統俳句協会全国俳句大会が各地持回りで開催される。今年は東北地方、宮城県松島で開催された。東日本大震災から三年半が経過したが、まだまだ復興途上という東北地方で開催して頂くのは心配であったが、赤川誓城さんを中心とした皆様が、誠心誠意お世話して下さいました素晴らしい会となった。松島は芭蕉の『奥の細道』で有名な風光明媚な場所である。大地震、津波の災害を受けた地であるが、美しい松島の三百以上ある島々で、津波が吸収され街の被害は多少緩和されたとも伺った。景色として見る松島には津波の影響ははつきりは分からないが、それぞれの島が被った被害は少なからずあったに違いないが分からないかった。しかしバスで連れて行って頂いた東の海岸は、今まだ復興のための海岸線の工事の真っ最中であった。荒々しい気象状況の続く東北地方は急に真っ黒な雲が押し寄せ、土砂降りの雨が降ったり、秋の虹が度々立ったりした。吟行バスを降りて五大堂、瑞巖寺などへの吟行も各自行くことが出来た。吟行会二日で三句の作品を投句するのは、却って難しかった。沢山作品が出来た中で、三句の自選は皆様成功したのであろうか。選ばれた選者の皆様には却って難しい選だったと思う。どの句もよかった。二日ばかりで一生懸命作った俳句であり、被災された方々を思い、亡くなられた多くの方々への鎮魂の心を一句に込めた句が殆どであった。

# 旬日記 汀子

平成二十五年十二月二日 ロイヤル俳壇

霜月のはや祝ぎごとに動き出す  
冬霞より街現れて高速路  
忽ちに富士消えて現れ冬霞  
葉を脱ぎてすつくと冬木なりしかと

十二月三日 有恒俳句会

散るための紅葉の色を尽しけり  
写し絵も濃紅葉の頃なりしかな  
名園の散るほかはなき冬紅葉  
冷たしと石のベンチを立ち上がる  
師走とは思へぬ陽気苑めぐる  
探ることのなきは渋柿なるべしと  
冬紅葉青空染めて行きにけり

十二月三日無名会

初雪と聞きて人事とも思ふ  
冬帝に守られし日の快晴に  
初雪の便り身近に聞いてをり  
冬菊の色を残して葉の萎えし  
初雪のしらせありしがそれつきり  
一枚の青空に置く冬の菊  
十二月三日 忘年句会

短日の移動三ヶ所つつがなし  
十二月七日 若屋ホトトギス会

芝生守るための落葉は掃くことに  
会師走しづかに混んで来たりけり  
鶴を見るための旅近づいてをり

十二月八日 下萌句会

フアックスを待つ風邪声の電話口  
飛来せし白鳥すぐに馴染みけり  
顔見世の昼夜通しといふ奢り

十二月十日 大阪倶楽部

落葉して風に従ふ遙かあり  
冬の朝真夜の風跡残さるる  
落葉にもなごりの色のありにけり  
普浦のすめらぎ慕ひ来し鴨ぞ  
冬枯の中に彩りありしこと  
まだ明けぬ早出の旅の冬の朝

十二月十日 綿葉倶楽部

構へたることが寒さを寄せつけず  
覚悟して来し寒さにはならざりし  
初雪の地より届きしものとして  
旅衣寒さと祝ぎのいづれとて  
十二月十二日 清交社

普浦の入江離れぬ浮寝鳥  
吹き荒れし風の狭庭の冬の朝  
旅先の寒さに備へをりしこと  
皆マスクして横切りぬ大都会

旅二三残して師走なりしこと  
スケジュール又重なつてゆく師走  
十二月十三日 工業倶楽部

短日の予定次々こなす旅  
明日も又遠き旅待つ日短か  
初雪のありしと告げて電話切れ  
十二月十五日 九州ホトトギス同人会

この日より鶴舞ふ空を描き来し  
この広き空に鶴待つ心寄せ  
十二月十五日 九州ホトトギス俳句大会

名残あり出水の鶴の旅終へて  
鶴の里より帰路となる旅心  
稿債と師走の待つてゐる家路  
十二月十八日 夏潮句会

庭に出て冷たき雨に濡れそぼつ  
又一人冷たき雨に濡れて着く  
散紅葉今年の彩を敷きつめて  
まだ旅を残し手つかぬ年用意  
冬紅葉色を散らしして一日雨  
まなうらになほ鶴舞うてゐる家居  
十二月二十日 時雨会

竈猫てふ名ばかりの今昔  
大阪の人情ばなし近松忌  
北風に向かふ着陸一とゆらぎ  
東京は北風に荒ると着陸す  
旅先の冷たき雨に濡れそぼつ

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十五年十二月三日 カトリック新聞選者吟

爽やかやすべてを神に感謝して

十一月五日 蕉心会

山茶花は地球のぬくみ恋うて散る

水の 中命 冷たく 眠りけり

釣竿の冷たく伸びてをりにけり

漣は 水 惑 星 の 胼 か とも

山茶花の天使のやうに墮ちゆけり

山茶花の 一生が 一本にあり

これよりは 余生 灯して 石 露 明り

十一月六日 六甲会

咳をしてより 挨拶の 長過ぎる

小火を出し 天に召されし 従姉妹はも

十一月六日 虚子記念文学館投句

雪の富士 今日も 車窓に 嵌めて 旅

十一月八日 野分会芦屋例会

背後 靈対峙して みる 鎌 鼬

粕汁を 吸り 風音 聞いて をり

この 美しき 二の 腕に 鎌 鼬

十一月九日 朝日カルチャー若草句会

クリスマス ミサオリオンに 呼応して

山 眠る 六 甲 嵐 放ち つつ

電 飾に 狸々 木の 目立 たざる

眠る 山地 震に 噴火に 起されて

恥ぢらひの色とも ポインセチア 赤

十一月十二日 土筆会

城址てふ 笹子の 天地ありにけり  
根深にも 日を恋ふ心ありにけり

十二月十四、十五日 九州ホトトギス同人会、大会

鶴の舞 一編の 詩を紡ぎつつ

日本一鶴の 棲みたき 町といふ

拒みつつ 人に馴れゆく 鶴であり

短日の 帰路 千キロといふ 鉄路

年内に 又 薩 摩 訪 ぶ 謀

十二月十五日 出水汀子句碑除幕記念祝句

朗 詠の 声 鶴の 空 引き 絞り

十二月十七日 北國文芸選者吟

夕日てふ スポット ライト 鶴の 舞

十一月十九日 「桑海」五百号祝句

若 緑 上 州に 祝ぐ 誌 齡 かな

十二月十九日 登高会

セーターを 脱いで 司祭の 顔となる

二億円 動かす おでん 屋の 隅で

おでん 酒やつと 本音が ぼつり ぼつり

着 飾れる 為に 冬木と なり ゆける

濁りたる おでん の 出汁にある 歴史

十二月二十一日 日本伝統俳句協会東京・神奈川合同部会

集まれば 師走の 顔を 解く 句座

黄 落を 舞ひ 上げて 鳩不 時着す

啄みて ついば みて 極月の 鳩

冬の日に 伸び切つて みる 電波塔

十二月二十一日 北國文芸新年特別選者吟

初 電 車 天 井 川を 潜り ゆく

十二月二十二日 野分会東京例会

白きもの 降らせ 今夜は 鎌 鼬

酒粕を 焼いて 杜氏の 夕餉 かな

鎌 鼬君に 咬まれた ことに して

粕汁に 下戸は 夢路を 辿り けり

十二月二十三日 日本伝統俳句協会千葉部会

大和めく 鴨 長門めく ゆりかもめ

舟の水尾 冷たく 伸びて けりにけり

水鳥に 沼の 表情 緩び けり

俳 諧に 遊び 天 皇 誕 生日

水に 慣れ 人に 馴れ 鴨 浮 寝 かな

十二月二十三日 千葉部会行上偶会

三毛猫の 横切る 師走の 場末 かな

熱 燗は 十 杯 まで といふ 佳人

十二月二十四日 若水句会

白菜の 小さく なつて ゆく 土 鍋

漱石忌 猫の 欠伸に 暮れ 初 むる

白菜を 割れば 表情 生れに けり

漱石忌 今日も 一日 選 句 かな

漱 石 忌 虚 子 へ の 手 紙 て ぶ 展 示

十二月二十五日 目黒学園句会

セーターを 解き 恨み 言二つ 三つ

鰯 焼いて 北の 生活で ありに けり

セーターに イブの 奇跡を 編み 込み

鰯 起し 連れ 吃 水 の 深 々 と

十二月二十五日 卯浪俳句教室選者吟

日表に 終の 主張 や 冬 紅 葉

一本の 古 木 要に 冬 木 立

公園を 抜けて 公園 冬うらら

十二月二十六日 「田鶴」近詠出句

初 鷄の 一羽に 里の 目覚め ゆく

初 雀どすん と 屋根を 凹ませ て

初 曆掛け 俳 小屋で ありに けり

初 電話掛 街 騒に 掻き 消され けり

十二月二十九日 鹿兒島城山公園投句箱に投句

火の 山の 鬚 整 へて 冬 日 影

# 雑詠

## 廣太郎 選

外したる蚊帳子供らの海となる 東京 河野美奇  
炎帝の口笛橋を鳴らす風 同  
青鷺の潮引き移る魚溜り 同  
蟻の道遠くローマへ通ずるか 徳島 岩田公次  
教へたるばかりの草矢撃つて来る 同  
鳩の子に潜水艦のやうな鯉 同  
鳥雲に 大國魂に鳩残し 東京 大久保白村  
祝詞にもある序破急やうらかに 同  
富士のよく見えて憲法記念の日 同  
一線を引きたる如く扇置く 袋井 湖東紀子  
半夏生雨意といふもの離れざる 同  
待つてゐる日傘と過ぎてゆく日傘 同  
明易の虚子を語りし一講座 長岡 安原 葉  
一汗のあとの一服みな笑顔 同  
総立ちとなり熱狂の汗の顔 同  
人類をささへてをりし緑かな 東京 橋本くに彦  
大空へ雲積み上げし晩夏かな 同  
秋近きことまだ何も動かざり 同

やがて黴びやがて朽ちゆくわが句かな 熊本 岩岡中正  
かく生きて身ほとり黴のものふやす 同  
とはいへどなほ黴びさせてならぬもの 同  
松清 浄 淡 海 清 浄 夏 菰 奈良 古賀しぐれ  
父といふ比良母といふ湖涼し 同  
天の川みづうみにある水のご糸 同  
父のなき部屋へ飛び込み秋の蟬 東京 上林純子  
マンドリン弾き手失ひ夜の秋 同  
黴びさせてならぬ亡父の硯箱 同  
東京の街きらきらと朝時雨 同 今井肖子  
けん玉のしづかな自転冬ぬくし 同  
まひるまにほると人逝く小春かな 同  
全身で受けとめてゐる大花火 龍ヶ崎 今橋眞理子  
触れてみる形代草に指ぬらし 同  
夫先に帰つてをりし夜の秋 同  
花火果て夜空は星のものとなる 神戸 藤井啓子  
船長になりたる気分サングラス 同  
涼しさに包まれてゐる神の森 同  
太陽にもらひし星や天道虫 福山 竹下陶子  
一水に糸引きたちし蛭かな 同  
今昔のなき初蟬の声なりし 同  
蟬の穴日向が蓋をしてをりぬ 香川 湯川 雅  
賈金のやうに錆びたる小判草 同  
歪むとき海月の向きの変るとき 同

# 雑詠句評（十一月号より）

保佳・中正・葉

憲明・静龍・美奇

眞理子・むつみ・とほ歩

千鶴子・廣太郎

## 雷猛り天地創造かくのごと 東京 内藤呈念

旧約聖書にも記紀に、ある天地創造物語。天地もまだ分かれていない混沌の世界。いま目の前の雷がちょうどそのようであるという、臨場感あふれる句である。雷鳴が轟き雷光が走る様子が、「天地創造」の一語で鮮明かつ的確に描かれている。雷鳴の聴覚、雷光の視覚、そして全身の感覚すべてが動員された一句である。

ちびくと酒ごくくとビールかな 福岡 今中榮泉

この句はビールという季題の句であるところが面白い。昔から酒はちびちびと飲むものだし、ビールはごくごくと咽喉を鳴らして飲むものである。この当り前のことが一句の中にきちつと納まる時、不思議な面白さをもった佳句となった。（保佳）

実に美味しそうな呑みっぷりから見事に季題を詠んでいる。この場合勿論「ビール」が季題であるが、ちよつとした酒場であろうか、楽しそうな飲み仲間の会話も聞こえてくるようである。特に夏の暑い日の最初の一杯は格別で、酒飲みとしては至福の時間が想像出来て、何も言う事はない。（廣太郎）

また、この句のドラマティックな内容にふさわしい、一句のリズムにも注目。「雷猛り」といきなりドラマに入ったのち、中七の「天地創造」の力強い一語で物語を展開し、さらに下五で、「かくのごと」と感嘆のことばでおさめて、また「かくのごと」「雷猛り」と、上五に帰る。こうして、この「かくのごと」は決して追加説明にはならず、一句をさらに感動深くリズムカルにしているのである。（中正）

旧約聖書の「創世の書」にある天地創造の件をお読みになった方は多いだろう。混沌としていた宇宙に、神が一声「光あれ」と言われ、そこから宇宙は始まった、というのである。これをいわゆるビックバン説と結び付ける話も聞いた事があるが、何れにせよこれを「雷」と詠んだのが新鮮である。（廣太郎）（以下略）

天地有情

江戸選

酔うてゐるほどの椿の色であり  
 青空に己を描く椿かな  
 籐椅子にありて見え来し庭の奥  
 病みし日を明るく語り露涼し  
 夏山の賽の河原といふところ  
 生きてをることを涼しと思ひけり  
 来し方を晒すが如く書を曝す  
 生涯に読み切れざりし書む曝す  
 明易の虚子の齡に近づきし  
 孤独たのしみてや梅雨の蝶も吾も  
 戦場のごと荒梅雨の中をゆく  
 駆け込んで大笹蕎麦や男梅雨  
 鬱蒼の夾竹桃も花咲けば  
 碧天の果てへぐんぐん雲の峰  
 忌の明けしよりの寂しさ揚花花  
 皆影となり仰ぎみる大火花  
 秋近しだんだん夜が淋しがり  
 阿波をどり手足たりないほど踊る

東京 稲畑廣太郎  
 同 長岡 安原 葉  
 同 群馬 中杉隆世  
 同 神戸 後藤比奈夫  
 同 相模原 木村享史  
 同 熊本 岩岡中正  
 同 樞原 稲岡 長  
 同 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 同 神戸 後藤立夫  
 同

飴色に仕上げを急ぐ糸のこ草  
 物書きの抄らぬま夜の秋  
 風鈴の音たしかめて買はぬ客  
 老舗なる江戸はここまで夏のれん  
 家の中もの音もなき夜の秋  
 思ひ出のごとく小さき火花かな  
 刃の入りし西瓜の声を聞く一瞬  
 ふる里の瓦うつくし盆の月  
 銀座にも若葉の候のありて歩す  
 新緑をゆき万緑の湖に着く  
 日雷大緑蔭にこもりぬし  
 草笛を卒寿の息の吹ききれず  
 切り出して氷室の氷青を帯ぶ  
 峰入をして来しといふ頬尖る  
 ハンモックいつしか森の人となる  
 飾らずに生きて幸せ姫女苑  
 入院の決まりし妻と明易し  
 下闇に憩ふ介護のありにけり

仙台 赤川誓城  
 同 東京 橋本くに彦  
 同 同 今井千鶴子  
 同 神戸 長山あや  
 同 熱海 嶋田一歩  
 同 福山 竹下陶子  
 同 神戸 三村純也  
 同 横浜 小坪律夫  
 同 東京 大久保白村  
 同

# 虚子忌の怪

## 稲畑汀子

虚子忌の怪

今年の虚子忌は珍しく快晴であった。丁度、桜の花の頃でもあって、鎌倉は混雑する。次々集まって来られる方で寿福寺は一杯になった。今年は、虚子忌の後にホトトギスの同人会も開催するので、新しく発表された同人の方々が参加して、何時もの虚子忌よりも大勢になった。

「こんな快晴は珍しいですね」

誰彼と挨拶が交わされた。桜は少し盛りを過ぎていたが、快晴であることが嬉しかった。

一月中旬にNHK出版から発売された本、『花鳥諷詠、そして未来』が順調に売っていて、虚子忌でも販売させて頂いていた。

ホトトギスの俳句の理念である花鳥諷詠について、また、ホトトギスを支えて来た作家たちを顕彰する内容は、ホトトギスが創刊千四百号を迎えた偉業を後世に残して行くために大切な事でもあった。

虚子忌は何時もと変わらず、虚子の身内が寛ぐ部屋に、いつもの顔ぶれが次々集って来た。

「ししはひへー」

「お元氣？」

「失礼致します」

遠くから来られた方々が挨拶に来られる。

「まあ、よく来て下さいましたね」

「あら、お元氣でよかったです」

「私、Kと申します、九州から参りました。同人に推薦させて頂いてありがとうございます」

「あら、あなたがKさん？今後とも宜しくお願い致します。貴方が人望の熱い方であることはよく存じておりますよ。今後ともよろしくお願い致します」

実直そうな笑顔に私は深々と頭を下げた。

「ところで、この機会に是非先生の一句をご本にお書き頂けませんかでしょうか」

「え？いいですよ。あら筆ペンが見つからないわ」

私の本を買って下さったのであろうと鞆の中を探した。

「これを使ってよ」

椿さんが渡してくれた筆ペンで書こうと受け取った本を開いたとき、

「あれ？」

と思った。



本は私の『花鳥諷詠、そして未来』ではなかった。でも、ともかくも私の俳句を書いて欲しいのならいいやと思ひながら、「空といふ……」と書き、手渡した。

「有難うございました」

その本を鞆に納めると、席を外して行かれた。何となく気になったが、法要の時間が来ていた。

四月十二日の消印で一通の手紙が我が家に届いた。

「前略……」

翌日、帰路機中の人となった私は早速鞆の中から一冊の本を取り出しました。勿論『花鳥諷詠、そして未来』です。

満足げにページを開きました。表紙から……裏表紙から……又裏表紙から……表紙から……。何度探しても汀子先生の御筆が見当たりません。同じ動作を繰り返している私に、通路の向こう側の座席の客が不思議そうな顔をして視ているようです。

……中の席に移動して又探すがやはり在りません。『不思議だな……』

暫く頭を冷やして、まさかと思ひながらも、もう一冊の本を取り出してみました。

何と、まさかが現実なのです。同じサイズの本、『かごしま俳句紀行』に汀子先生の御筆が……。存在したことははっきりしたのですが、一瞬間が白くなってしまいました。(中略) 何

と失礼なことをしてしまったのか……何とお詫びをしたらいいのか……(中略)

『花鳥諷詠、そして未来』を熟読してこれからの作句の指針とする事で、お許し願いたいと思っております。K 拝  
温かいものが私の胸に広がっていくのを感じていた。

